銀髪のレヴィアタン

Ｒｙｕ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
銀髪のレヴィアタン

【Ｎコード】
Ｎ０８５４ＢＡ

【作者名】
Ｒｙｕ

【あらすじ】
自然と共に発展を遂げてきた世界‐ロスティア‐

その世界の大陸の一つであるグラン大陸に住む一人の女性がいた・・・

これはその女性が大きな戦いに巻き込まれていく壮大な物語・・・・

-小さな始まり-（前書き）

何らかの形でこの小説を覗いてくれた方にまずは感謝をしたいと思います。

レヴィたちの壮大な物語を楽しんでいただければ幸いです。

-小さな始まり-

ここは自然と共に発展をとげてきた世界ロスティア。
人々は自然と共に長い歴史を築いてきた。
しかしそんな世界にある日事件が起きる・・・

グラン大陸
-トーマ山-
ここはグラン大陸のとある場所にある山
ここに小さな小屋を立てて住んでいる美しい女性がいた。

「・・・この本も飽きてきたわね。」

魔導書を暇潰しに読んでいたこの女性の名はレヴィアタン＝エンヴィ、長い銀髪と紅い瞳が特徴的なハーフエルフの女性である。
彼女は最近の生活に退屈していた。

彼女は元々グランドルフ王国に使える騎士だった。
しかしある日を境に騎士をやめ離れた山へ移り住んだ。
つまり元々騎士だった彼女にとってあまり動かない日々は退屈なのである。

しかし決して勘違いしてはいけないのが彼女は決して争いを好んでいる訳ではないということである。

「・・・少し体を動かそうかしら。」

しばらく考えたあとレヴィは椅子から立ち上がり刀のような剣を持ち、小屋から外に出た。

「この辺りでいいかな・・・」

しばらくレヴィが歩くとそれなりに広い場所へと出た。

「・・・・」

レヴィは深呼吸をすると目を見開き剣を降り始めた。

その動きは美しくも力強い実戦的なものだった。

誰が見ても彼女が幾多の戦場を駆け抜けて来たことがわかるほどに。

しばらくすると退屈をしのげたのか彼女は剣を振るうのをやめる。

「・・・これくらいでいいかな。」

満足したレヴィは静かに小屋へと歩き出す。

「もう昼か・・・」

彼女は時間を確認すると台所へと向かい鍋に入っていたカレーを暖めはじめる。

そしてしばらくしてカレーを暖め終わった彼女は皿にライスを継ぎ、カレーをかける。
いわゆるカレーライスである。

「いただきます。」
彼女静かにカレーライスを食べ始める。

「・・・・♪」

どうやら彼女の大好物の様だ。
この様子だとほぼ毎日食べているのだろう、飽きないのだろうか・・・

「ごちそうさま。」

食事を終えると彼女は食器を片付け、山を下りる準備をする。

「・・・材料の買い足しをしておかなければね。」

彼女は小屋を出るとカレーの材料を買い足しに下山を始める。

「・・・・・」

彼女はしばらく無言で歩き続けた、すると・・・

「・・・・・誰だ?」

彼女は自分に向けられた敵意を感じる。

すると姿を現したのは山賊と思われる者たちだった。

「へっへっへっ、こんな山奥にこんな綺麗な女がいるとはなあ・・・」

「アニキ、どうしますかい？」

「そりゃ決まってるだろ、金目のモノついでにいろいろとやらせてもらうさ！」

山賊たちは下品な話を始める。

するとそれが頭にきたのかレヴィは山賊たちを睨み付けながらこう言った。

「勝手に話を進めないで、私はあなたたちに何かを渡すつもりもないし何かをされるつもりもないわよ？」

「なっ、てめえっ・・・」

「その生意気な口を叩けなくしてやる！」

「かかれ！」

山賊たちはレヴィに向けて攻撃を仕掛ける。

しかしレヴィはその山賊たちの攻撃をいとも簡単に避ける。

「な、なんで当たらねえ！？」

「相手の実力もわからないなんて未熟なやつらね・・・・・」

「う、うるせえ！」

山賊アニキがさらに攻撃を仕掛けようとした瞬間、レヴィも反撃に出る。

「・・・・ふんっ！」

レヴィは剣を鞘に入れたまま山賊アニキの鳩尾に力強い攻撃を仕掛けた。

「ぐ・・・お・・・おぶっ！？」

山賊アニキはその場に倒れ込む。

「あ、アニキ～！」

「・・・さっさとつれて帰りなさい。」

「ひ、ひい～～～！！」

山賊たちはアニキをつれて早々に引き上げる。

「・・・・・」

山賊たちが引き上げるとレヴィは再び歩き始める。
下山を終えると彼女は村に向かって歩き始めた。

-パセ村-

「・・・・・・」

レヴィは無言で村へ入っていく。
すると村の住人たちがひそひそと話を始める。

「・・・またきてるぜ、あのハーフエルフ。」

「・・・山から降りてきて俺たちの村にいつも何をしにきてやがるんだ。」

「・・・見てよあの目、明らかに私たち人間を見下してる目だわ。」

村人たちからレヴィの印象は良くない、何故なら彼女がハーフエルフだからである。この世界では基本的にハーフエルフに対する差別が強い。
人間たちやエルフの偏見のせいである。

「・・・全く人間でもエルフでもないなんて気持ち悪い。」
「・・・・・」

レヴィはそんなことを言われてもお構い無しに歩き続ける。

道具屋

「いらっしゃい。」
「久々に来てやったわよ、店長。」
「おおあんたか、しばらく来なかったが何処で何をしてたんだ。」
「他のところのスパイスとかも試してたのよ。」
「はっは・・・あんたらしい、いつものやつだろ？とっといてやったぜ。」
「やっぱりここのが一番だ。」
「だったら他のとこなんか行かんでいつもここにこい。」
「ああ、そうね・・・ところでバイトは雇わないの？」
「客によって態度変えやがるやつらなんて雇えるか。」
「・・・あなたらしいわね。」
「じゃああんたも大変だろうが頑張れよ、またな。」
「ええ、また。」

レヴィは道具を後にした。

するとレヴィが村から出ようとすると悲鳴が聞こえて来た。

「うわあああーーー・・・！」

「・・・！？」

レヴィはその悲鳴に反応する。

「放っておくわけにはいかないか・・・」

レヴィは悲鳴の方向に向かって走り出す。

「ここは村長のやつの家・・・」

悲鳴が聞こえた場所は村長の家だった。

「なるべく入りたくなかったんだけどね・・・」

レヴィは村長の家へと入った、するとそこは悲惨な情況だった。

「おいじじい、貴様の持ってるその石をよこしな！」

「い、嫌だ、これはわしのコレクションなんじゃ！貴様のようなやつにやるものか！」

彼女が目にしたのは村長が魔法使い風の女におどされているところだった。

「はっ、強欲なやつだねぇ・・・まるでグリードみたいなやつだよ。」

「・・・・」

「ん、・・・あんたは？」

「あ、おまえは山に住んでいるハーフエルフ！おい、わしを助けろ！」
「へぇ・・・あんたもハーフエルフなんだ。」
「まさかあなた・・・？」
「そうさ、アタシもハーフエルフさ！、あたしの名はスペルビア＝プライド、あんたの名は？」
「・・・・レヴィアタン＝エンヴィ。」
「・・・あはははっ！」

レヴィの名を聞いて突然笑い出すスペルビ、そして笑いをやめ再び喋り始める。

「驚いたよ、ハーフエルフでしかも七つの大罪の名を持つなんてね・・・」
「だったらなに・・・？」
「あんた、アタシたちと手を組まないかい？」
「・・・なに？」
「あんたもハーフエルフなら今の世界の現状をしっているだろ？アタシたちと一緒に今の世界をぶっ壊そうじゃないか！」
「・・・残念だけど断らせてもらうわ。」
「・・・・何だと？」
「今の世界にだって私にとって大切な人たちがいるの・・・それに私は世界を変えるのは若い世代の人たちだって思ってるから・・・」
「そう・・・断るんだね・・・このアタシからの誘いを！！」

スペルビは怒りと共に巨大な鎌を取り出しレヴィに襲いかかる。

「・・・！」
「ぶっ殺してやる！」

レヴィはスペルビの攻撃を剣で受け止める。
しかしスペルビの攻撃はまだ止まない。

（・・・この子凄い力ね。）

「うおらあっ！」

スペルビの一振りでレヴィは吹き飛ばされる。

「くっ・・・！」
「あんたは、こんな世界に残す価値があるって言うのかい！」
「世界はどうでもいい・・・ただ大切なヒトたちがこの今の世界にいる、それだけよ！」
「そいつらだってハーフエルフを差別してるかも知れないじゃないか！」
「あの子たちはそんなことはしない・・・！」
「わからないさ！ヒトは簡単に変わっちまうんだ、だから人間もエルフもクズは全員滅ぼすべきなんだよ！」

スペルビは巨大な黒炎の玉を作り出す。

「！？」
「そんな甘い理想を語るあんたのその考えをアタシが燃やし尽くしてやる！！」

「まずい、このままじゃ・・・」
「消えろぉぉぉっ！」

スペルビは黒炎の玉をレヴィ目掛けて投げつける。

「・・・やらせるかあっ！」

レヴィは即座に氷の壁を作り出し黒炎を相殺させる。

「何だって！？」

「私だってハーフエルフなのよ？魔法が使えないわけが無いじゃない。」

「よりによって氷だなんて・・・相性が悪すぎだよ！」

「・・・まだやる？」

魔法を相殺され悔しがるスペルビに対してレヴィはそう言う。

「うう～～・・・今日のところは引き上げてやるよ！次は無いからね、覚悟しときな！」

そう言うと突然スペルビは姿を消した。

「・・・あの子、十代後半かしら？」

レヴィはスペルビが引き上げた後、いきなり意味不明なことを呟いた。

すると騒ぎを聞き付けたのか村人が村長の家に入ってくる。

「村長、大丈夫かっ！？・・・貴様はハーフエルフ！」

村人はレヴィを睨み付ける。

「さてはおまえが村長を襲ったのか！？」

レヴィは村人の質問にこう答えた。

「だとしたら・・・？」
「こ、この村から出ていけ！そ、そしたら命だけはとらないでやる！」
「あなたに私が殺せるの？知っているでしょう、私は元々グランドルフ王に仕えていた騎士なのよ、それにエルフの血を引いているのだから魔法も使える・・・この村一つ滅ぼすなんてわけ無いわ。」
「ひっ・・・」
「でもまあ引き上げてあげるわ、それとこんな村二度と来ないから安心なさい、ね？」
「・・・・・」
「それじゃさようなら・・・それとこの石は貰っていくわ、いいわね？」

レヴィは威圧的な目で村長に問う。

「ひっ・・・わ、分かりました。」

レヴィはそう言うと村を後にし山へと一旦戻る。

（この石がなんなのか・・・気になるわね。）

レヴィはそう考えながら荷物をまとめる。

（しばらくはこの家にも戻れそうに無いわね・・・）
そう思いながらレヴィが小屋から出ると・・・
「あねさん！」
「！？」

外にいたのは昼頃に襲ってきた山賊たちだった。

「・・・何の用かしら？」
「俺たちあねさんの強さに惚れ込みました！子分にしてもらえないでしょうか？」
「・・・・・」
「お願いします！」
「・・・・勝手になさい。」
「ありがとうございやす！」

レヴィは山賊たちの願いを適当に聞き入れる。

「俺はロック、あねさんこれからよろしく頼みますぜ！」
「オイラはゴンといいやす。」
「・・・・・」

レヴィは二人の自己紹介をどうでも良さそうに聞き流した。

「無視ってそりゃないですよ・・・」

（あの子・・・スペルビにまた会えるかしら・・・恐らくこの石を持っていれば向こうからまたやってくるはず・・・）

レヴィはこうして大きな戦いに巻き込まれていくのであった・・・

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

- ？？？ -

「くそっ！」

スペルビは悔しそうに机をダンッと叩く。

「手痛くやられたな、スペルビ。」

部屋の奥から目付きの悪い男が現れる。

「グリード・・・！」

「一体どんなやつに負けたんだよ！」

「負けたわけじゃないよ！」

「へいへい、いいから教えろって。」

「レヴィアタンって女だ・・・！」

「ほう・・・レヴィアタンねぇ・・・ハーフエルフか？」

「そうだよ、アタシたちと同じね・・・！」

「てめえが引き上げざる負えないやつとはなあ・・・仲間に引き込めれば戦力になるはずだな。」

「そう簡単にいくかね・・・」

「・・・そういえば星石は手に入れたのかよ？」

「あっ・・・・」

「おまえまさか忘れて来たんじゃ・・・」

「・・・あのじじいをもう一度脅してくる！」

「待て。」

「あんたは・・・！」

背の高い男がスペルビを呼び止めた。

「もう石はあの場所にはない、レヴィアタンが持っていった。」

「あの女！」
「・・・・・星石の収集も一筋縄じゃいきそうにねぇな。」
「問題ない、奪われたのなら奪い返せばいい。」
「簡単に言いやがる・・・動くのは俺たちなんだぜ？」
「文句を言うな、それがおまえの仕事だろう。」
「ちっ・・・人使いの粗い野郎だぜ。」
「そう言えば他の三人は？」
「それぞれ星石を集めにいっている、時期に戻ってくるだろう・・・」
「まああまり期待しないほうがいいだろう、このバカみたいに失敗してくるかもしんねぇし・・・」
「誰がバカだって！？」
「おまえだよ、おまえ。」

グリードとスペルビが喧嘩を始める、すると・・・

「ふう・・・」

長身の男はため息をつくと部屋から出ていく。

「ん・・・？あの野郎、どうしたんだ？」
「まだ話は終わってないよ！」
「いてっ、やめろテメェ！」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「ふふふ・・・」

長身の男は空を眺め不適に笑う。

（十二個の星石・・・レヴィアタン・・・面白くなってきた。）

「我らの計画は・・・これからが始まりかも知れんな・・・・・」

星石と言われている石を集めている集団。

七つの大罪の名を冠したものたち。

ハーフエルフ。

これからこの世界でどんな事が起きるのか・・・

今壮絶な戦いが、幕を開ける・・・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0854ba/

銀髪のレヴィアタン

2012年1月1日23時48分発行